

# にごりえ

樋口一葉

青空文庫



おい木村さん信さん寄つてお出よ、お寄りといつたら寄つても宜いではないか、又素通り  
 で二葉やへ行く氣だらう、押かけて行つて引ずつて來るからさう思ひな、ほんとにお湯な  
 ら歸りに吃度よつてお呉れよ、嘘つ吐きだから何を言ふか知れやしないと店先に立つて  
 馴染み突かけ下駄の男をとらへて小言をいふやうな物の言ひぶり、腹も立たずか言  
 譯しながら後刻に後刻にと行過るあとを、一寸舌打しながら見送つて後にも無い  
 もんだ來る氣もない癖に、本當に女房もちに成つては仕方がないねと店に向つて闕  
 をまたぎながら一人言をいへば、高ちやん大分御述懐だね、何もそんなに案じるにも  
 およまい焼棒杓と何とやら、又よりの戻る事もあるよ、心配しないで呪でもして待つ  
 が宜いさと慰さめるやうな朋輩の口振、力ちやんと違つて私には技倆が無いからね、  
 一人でも逃しては残念さ、私しのやうな運の悪い者には呪も何も聞きはしない、今夜  
 も又木戸番か、何たら事だ面白くもないと肝癩まぎれに店前へ腰をかけて駒下駄  
 のうしろでとんくと土間を蹴るは二十の上を七つか十か引眉毛に作り生際、白粉

べつたりとつけて唇は人喰ふ犬の如く、かくては紅も厭やらしき物なり、お力と呼ばれたるは中肉の背恰好すなりつとして洗ひ髪の大嶋田に新わらのさわやかさ、頸もと計の白粉も榮えなく見ゆる天然の色白をこれみよがしに乳のあたりまで胸くつろげて、烟草すばく長烟管に立膝の無作法さも咎める人のなきこそよけれ、思ひ切つたる大形の裕衣に引かけ帯は黒縞子と何やらのまがひ物、緋の平ぐけが背の處に見えて言はずと知れし此あたりの姉さま風なり、お高といへるは洋銀の簪で天神がへしの鬚の下を搔きながら思ひ出したやうに力ちやん先刻の手紙お出しかといふ、はあと氣のない返事をして、どうで來るのでは無いけれど、あれもお愛想さと笑つて居るに、大底におしよ巻紙一一尋も書いて二枚切手の大封じがお愛想で出来る物かな、そして彼の人は赤坂以來の馴染ではないか、少しやそつとの紛雜があろうとも縁切れになつて溜る物か、お前の出かた一つで何うでもなるに、ちつとは精を出して取止めるやうに心がけたら宜かろ、あんまり冥利がよくあるまいと言へば御親切に有がたう、御異見は承り置まして私はどうも彼んな奴は虫が好かないから、無き縁とあきらめて下さいと人事のやうにいへば、あきれたものだと笑つてお前などは其我まゝが通るから豪勢さ、此身になつては仕方がないと團扇を取つて足元をあふぎながら、昔しは花よの言ひなし可笑しく、表

とほをとこみ  
を通る男を見かけて寄つてお出でと夕ぐれの店先にぎはひぬ。

店は二間間口の二階作り、軒には御神燈さげて盛り鹽景氣よく、空壇か何か知らず、

銘酒あまた棚の上にならべて帳場めきたる處もみゆ、勝手元には七輪を煽く音折

々に騒がしく、女主が手づから寄せ鍋茶碗むし位はなるも道理、表にかゝげし看板

を見れば子細らしく御料理とぞしたゝめける、さりとして仕出し頼みに行たらば何とか

いふらん、俄に今日品切れもをかしかるべく、女ならぬお客様は手前店へお出か

けを願ひまするとも言ふにかたからん、世は御方便や商買がらを心得て口取り焼

肴とあつらへに來る田舎ものもあらざりき、お力といふは此家の一枚看板、年は隨

一若けれども客を呼ぶに妙ありて、さのみは愛想の嬉しがらせを言ふやうにもなく我ま

至極の身の振舞、少し容貌の自慢かと思へば小面が憎くいと蔭口いふ朋輩もありけ

れど、交際ては存の外やさしい處があつて女ながらも離れともない心持がする、あ

心とて仕方のないもの面ざしが何處となく冴へて見へるは彼の子の本性が現はれるので

あらう、誰しも新開へ這入るほどの者で菊の井のお力を知らぬはあるまじ、菊の井のお

力か、お力の菊の井か、さても近來まれの拾ひもの、あの娘のお蔭で新開の光りが添

はつた、抱へ主は神棚へさゝげて置いても宜いとて軒並びの羨やみ種になりぬ。

お高は往來の人のなきを見て、力ちやんお前の事だから何があつたからとて氣にしても居まいけれど、私は身につまされて源さんの事が思はれる、夫は今の身分に落ぶれては根つから宜いお客ではないけれども思ひ合ふたからには仕方がない、年が違をが子があるがさ、ねへ左様ではないか、お内儀さんがあるといつて別れる物かね、構ふ事はない呼出してお遣り、私しのなぞといつたら野郎が根から心替りがして顔を見てさへ逃げ出すのだから仕方がない、どうで諦め物で別口へかゝるのだがお前のは夫れとは違ふ、了

簡一つでは今のお内儀さんに三下り半をも遣られるのだけれど、お前は氣位が高いから源さんと一處にならうとは思ふまい、夫だもの猶の事呼ぶ分に子細があるものか、手紙をお書き今に三河やの御用聞きが来るだろうから彼の子僧に使ひやさんを爲せるが宜い、何の人お嬢様ではあるまいし御遠慮計申でなる物かな、お前は思ひ切りが宜すぎ

るからいけない兎も角手紙をやつて御覽、源さんも可愛さうだわなと言ひながらお力を見れば烟管掃除に餘念のなきは俯向たるまゝ物いはず。

やがて雁首を奇麗に拭いて一服すつてポンとはたき、又すいつけてお高に渡しながら氣をつけてお呉れ店先で言はれると人聞きか悪いではないか、菊の井のお力は土方の手傳ひを情夫に持つなど、考違へをされてもならない、夫は昔しの夢がたりき、何の今は忘

来て仕舞しまつて源げんとも七おもとも思おもひ出だされぬ、もう其その話はなしは止やめ〜といひながら立たちあがる時とき  
 表おもてを通とほる兵へこ兒おび帶おびの一いむれ、これ石いしか川かはさん村むら岡おかさんお力りきの店みせをお忘わすれなされたかと呼よべ  
 ば、いや相あひ變かはらず豪ごう傑けつの聲こゑかゝり、素す通どほりもなるまいとてずつと這はい入いるに、忽たちち廊らう下か  
 にばた〜といふ足あしおと、姉ねさんお銚てう子しと聲こゑをかければ、お肴さかなは何なにをと答こたふ。三さ味みの音ね景け  
 氣いきよく聞きこえて亂らん舞ぶの足あし音おとこれよりぞ聞きこえ初そめぬ。

## 二

さる雨あめの日ひのつれ／＼に表おもてを通とほる山や高まだ帽かぼう子しの三を十とこ男をとこ、あれなりと捉とらずんは此この降ふりに  
 客きやくの足あしとまるまじとお力りきかけ出だして袂たもとにすがり、何どうでも遣やりませぬと駄だ々々をこねれば、  
 容きり貌ようよき身みの一とく徳とく、例れいになき子し細さいらしきお客きやくを呼よび入れて二かい階かいの六ち疊ように三さ味み線せんなしのしめ  
 やかなる物もの語が、年としを問とはれて名なを問とはれて其その次つぎは親おやもとの調しらべ、士し族ぞくかといへば夫そ  
 れは言いはれませぬといふ、平へい民みんかと問とへば何どうござんしようかと答こたふ、そんなら華くわ族ぞく  
 と笑わらひながら聞きくに、まあ左さ様さうおもふて居みて下くだされ、お華くわ族ぞくの姫ひい様さまが手てづからのお酌しやく  
 かたじけなく御お受うけなされとて波なみ々々とつぐに、さりとは無ぶ作さ法ほうな置おきつぎといふが有ある物もの

か、夫れは小笠原か、何流ぞといふに、お力流とて菊の井一家の左法、疊に酒のま  
 する流氣もあれば、大平の蓋であほらする流氣もあり、いやなお人にはお酌をせぬとい  
 ふが大詰めの極りでござんすとて臆したるさまもなきに、客はいよ／＼面白がりて履歴  
 をはなして聞かせよ定めて凄ましい物語があるに相違なし、たゞの娘あがりとは思は  
 れぬ何うだとあるに、御覽なさりませ未だ鬢の間に角も生へませず、其やうに甲羅は經ま  
 せぬとてころ／＼と笑ふを、左様ぬけてはいけぬ、眞實の處を話して聞かせよ、素性が  
 言へずは目的でもいへとて責める、むづかしうござんすね、いふたら貴君びつくりなさ  
 りましょ天下を望む大伴の黒主とは私が事とていよく笑ふに、これは何うもならぬ  
 其やうに茶利ばかり言はで少し眞實の處を聞かしてくれ、いかに朝夕を嘘の中に送るか  
 らとてちつとは誠も交る筈、良人はあつたか、それとも親故かと眞に成つて聞かれるに  
 お力かなしく成りて、私だとして人間でござんすほどに少しは心にしみる事もあります、  
 おやは早くになくなつて今は眞實の手と足ばかり、此様な者なれど女房に持たうといふ  
 て下さるも無いではなけれど未だ良人をば持ませぬ、何うで下品に育ちました身なれば此  
 様な事して終るのでござんしよと投出したやうな詞に無量の感があふれてあだなる姿の  
 浮氣らしきに似ず一節さむろう様子のみゆるに、何も下品に育つたからとて良人の持てぬ

事はあるまい、殊にお前のやうな別品さむではあり、一足とびに玉の輿にも乗れさうな  
 もの、夫れとも其やうな奥様あつかひ虫が好かで矢張り傳法肌の三尺帯が氣に入るか  
 など問へば、どうで其處らが落でござりましよ、此方で思ふやうなは先様が嫌なり、來  
 いといつて下さるお人の氣に入るもなし、浮氣のやうに思召ましようが其日送りでご  
 ざんすといふ、いや左様は言はさぬ相手のない事はあるまい、今店先で誰れやらがよろ  
 しく言ふたと他の女が言傳たでは無いか、いづれ面白い事があらう何とだといふに、  
 あゝ貴君もいたり穿索なさります、馴染はざら一面、手紙のやりとりは反古の取かへツ  
 こ、書けと仰しやれば起證でも誓紙でもお好み次第さし上ませう、女夫やくそくなどと言  
 つても此方で破るよりは先方様の性根なし、主人もちなら主人が怕く親もちなら親の  
 言ひなり、振向ひて見てくれねば此方も追ひかけて袖を捉らへるに及ばず、夫なら廢せと  
 て夫れ限りに成りまする、相手はいくらもあれども一生を頼む人が無いのでござんすとて  
 寄る邊なげなる風情、もう此様な話しは廢しにして陽氣にお遊びなさりまし、私は何も沈  
 んだ事は大嫌ひ、さわいでさわいで騒ぎぬかうと思ひますとて手を叩いて朋輩を呼べ  
 ば力ちやんだ分おしめやかだねと三十女の厚化粧が來るに、おい此娘の可愛い人は何と  
 いふ名だと突然に問はれて、はあ私はまだお名前を承りませんでしたといふ、嘘をいふ

と益が来るに 魔様へお参りが出来まいぞと笑へば、夫れだどつて貴君今日お目にかゝつたばかりでは御坐りませんか、今改めて伺ひに出やうとして居ましたといふ、夫れは何の事だ、貴君のお名をさと揚げられて、馬鹿々々お力が怒るぞと大景氣、無駄ばなしの取りやりに調子づいて旦那のお商買を當て見ませうかとお高がいふ、何分願ひますと手のひらを差出せば、いゑ夫には及ませぬ人相で見ますると如何にも落つきたる顔つき、よせくじつと眺められて棚おろしても始まつては溜らぬ、斯う見えても僕は官員だといふ、嘘を仰しやれ日曜のほかに遊んであるく官員様があります物か、力ちやんまあ何でいらつしやらうといふ、化物ではいらつしやらないよと鼻の先で言つて分つた人に御褒賞たと懐中から紙入れを出せば、お力笑ひながら高ちやん失禮をいつてはならない此お方は御大身の御華族様おしのびあるきの御遊興さ、何の商買などがおありなさう、そんなのでは無いと言ひながら蒲團の上に乗せて置きし紙入れを取あげて、お相方の高尾にこれをばお預けなされまし、みなの方に祝儀でも遣はしませうとて答へも聞かずんくと引出すを、客は柱に寄かゝつて眺めながら小言もいはず、諸事おまかせ申すと寛大の人なり。

お高はあきれて力ちやん大底におしよといへども、何宜いのさ、これはお前にこれは姉

さんに、大きいので帳場の拂ひを取つて残りは一同にやつても宜いと仰しやる、お禮を申  
 て頂いてお出でと蒔散らせば、これを此娘の十八番に馴れたる事とて左のみは遠慮もい  
 ふては居ず、旦那よろしいのでございますかと駄目を押し、有がたうございませと搔き  
 さらつて行くうしろ姿、十九にしては更けてるねと旦那どの笑ひ出すに、人の悪い事を  
 仰しやるとお力は起つて障子を明け、手摺りに寄つて頭痛をたゞくに、お前はどうぞす  
 る金は欲しくないかと問はれて、私は別にほしい物がござんした、此品さへ頂けば何より  
 と帯の間から客の名刺をとり出して頂くまねをすれば、何時の間に引出した、お取かへに  
 は寫眞をくれとねだる、此次の土曜日に來て下されば御一處にうつしませうとて歸  
 りかゝる客を左のみは止めもせず、うしろに廻りて羽織をきせながら、今日は失禮を致  
 しました、亦のお出を待ますといふ、おい程の宜い事をいふまいぞ、空誓文は御免だと  
 笑ひながらさつくと立つて階段を下りるに、お力帽子を手にして後から追ひすがり、嘘  
 か誠か九十九夜の辛棒をなさりませ、菊の井のお力は鑄型に入つた女でござんせぬ、又  
 形のかはる事もありますといふ、旦那お歸りと聞て朋輩の女、帳場の女主人もかけ出し  
 て唯今は有がたうと同音の御禮、頼んで置いた車が來しとて此處からして乗り出せば、  
 家中表へ送り出してお出を待ますの愛想、御祝儀の餘光としられて、後には力ちや

んだいめうじんさま  
大明神様これにも有がたうの御禮山々。

## 三

客は結城朝之助とて、自ら道楽ものとは名のれども實体なる處折々に見えて身は  
 無職業妻子なし、遊ぶに屈強なる年頃なればにや是れを初めに一週には二三度の  
 通ひ路、お力も何處となく懐かしく思ふかして三日見えねば文をやるほどの様子を、朋  
 輩の女子ども岡焼ながら弄かひては、力ちやんお楽しみであらうね、男振はよし  
 氣前はよし、今にあの方は出世をなさるに相違ない、其時はお前の事を奥様とでも  
 いふのであらうに今つから少し氣をつけて足を出したり湯吞であほるだけは廢めにおし人  
 がらが悪いやねと言ふもあり、源さんが聞たら何うだらう氣違ひになるかも知れないとて  
 冷評もあり、あゝ馬車にのつて來る時都合が悪るいから道普請からして貰いたいね、  
 こんな溝板のがたつく様な店先へ夫こそ人がらが悪くて横づけにもされないではない  
 か、お前方も最う少しお行義を直してお給仕に出られるやう心がけてお呉れとずばノ  
 といふに、エ、憎くらしい其ものいひを少し直さずは奥様らしく聞へまい、結城さん

が來たら思ふさまいふて、小言をいはせて見せようとて朝之助の顔を見るより此様な事を申て居まする、何うしても私共の手にのらぬやんちやなれば貴君から叱つて下され、第一湯呑みで呑むは毒でござりましよと告口するに、結城は眞面目になりてお力酒だけは少しひかへるとの嚴命、あゝ貴君のやうにもないお力が無理にも商買して居られるは此力と思し召さぬか、私に酒氣が離れたら坐敷は三味堂のやうに成りませう、ちつと察して下されといふに成程くとして結城は二言といはざりき。

或る夜の月に下坐敷へは何處やらの工場の一連れ、井たゝいて甚九かつぽれの騷ぎに大方の女子は寄集まつて、例の二階の小坐敷には結城とお力の二人限りなり、朝之助は寝ころんで愉快らしく話しを仕かけるを、お力はうるさうに生返事をして何やらん考へて居る様子、どうかしたか、又頭痛でもはじまつたかと聞かれて、何頭痛も何もしませぬけれど頻に持病が起つたのですといふ、お前の持病は肝癩か、いゝゝ、血の道か、いゝゝ、夫は何だと聞かれて、何うも言ふ事は出来ませぬ、でも他の人ではなし僕ではないか何んな事でも言ふて宜さそうなもの、まあ何の病氣だといふに、病氣ではござんせぬ、唯こんな風になつて此様な事を思ふのですといふ、困つた人だなど種々秘密があると見える、お父さんとは聞けば言はれませぬといふ、お母さんとは問へ

ば夫れも同じく、これまでの履歴はといふに貴君には言はれぬといふ、まあ嘘でも宜いさよしんば作り言にしろ、かういふ身の不幸だとか大底の女はいはねばならぬ、しかも一度や二度あふのではなし其位の事を發表しても子細はなからう、よし口に出して言はなからうともお前に思ふ事がある位めくら按摩に探ぐらせても知れた事、聞かずとも知れて居るが、夫れをば聞くのだ、どつち道同じ事だから持病といふのを先きに聞きたいといふ、およしなさいまし、お聞きになつても詰らぬ事でござんすとお力は更に取りあはず。

折から下坐敷より杯盤を運びきし女の何やらお力に耳打して兎も角も下までお出よといふ、いや行き度ないからよしてお呉れ、今夜はお客が大變に酔ひましたからお目にかゝつたとてお話しも出来ませぬと斷つておくれ、あゝ困つた人だねと眉を寄せるに、お前それでも宜いのかへ、はあ宜いのかと膝の上で撥を弄べば、女は不思議さうに立つてゆくを客は聞すまして笑ひながら御遠慮には及ばない、逢つて來たら宜からう、何もそんなに體裁には及ばぬではないか、可愛い人を素戻しもひどからう、追ひかけて逢ふが宜い、何なら此處へでも呼び給へ、片隅へ寄つて話しの邪魔はすまいからといふに、串談はぬきにして結城さん貴君に隠くしたとて仕方がないから申ますが町内で少し

は巾もあつた蒲團ふとんやの源七げんしちといふ人、久しい馴染なじみでござんしたけれど今は見るかげもなく  
 貧乏びんぼうして八百屋やほやの裏うらの小さな家うちにまい／＼つぶろの様やうになつて居いまする、女房にようばもあり子  
 どもあり、私わたしがやうな者に逢あひに来きる歳としではなけれど、縁えんがあるか未いまだに折おりふし何なんの彼か  
 といつて、今いまも下坐敷したざしきへ来たのでござんせう、何なにも今いまさら突つきだ出すといふ譯わけではないけれ  
 ど逢あつては色いろ々々めんどろ面倒めんどうな事こともあり、寄よらず障さわらず歸かへした方はうが好いいのでござんす、恨うらまれ  
 るは覺悟かくごの前まへ、鬼おにだとも蛇じやだとも思おもふがようござりますとて、撥ぼちたを疊たみすこに少すこし延のびあがりて  
 表おもてを見みおろせば、何なんと姿すがたが見みえるかと矚なぶる、あゝ最もう歸かへつたと見みえますとて茫然ぼんとして居あ  
 るに、持病ぢびやうといふのは夫それかと切込きりこまれて、まあ其様そのんな處ところでござんせう、お醫者いしやさま様で  
 も草津くさつの湯ゆでもと薄淋うすさびしく笑わらつて居あるに、御本尊ごほんぞんを拜おがみたいな俳優やくしやで行いつたら誰たれ  
 の處ところだといへば、見みたら吃驚びつくりでござりませう色の黒くろい背せの高たかい不動ふどうさまの名代めうだいといふ  
 では心意氣こゝろいきかと問とはれて、此様このんな店みせで身しん上しやうはたくほどの人ひと、人ひとの好いいばかり取得とりえ  
 ては皆無かいむでござんす、面白おもしろくも可笑をかしくも何なんともない人ひとといふに、夫それにお前まへは何どうし  
 て逆上のほさせた、これは聞き處きところと客きやくは起おきかへる、大方おほかた逆上のほせせう  
 をも此頃このころは夢ゆめに見みない夜よはござんせぬ、奥様おくさまのお出で來きなされた處ところを見みたり、ぴつたり  
 と御出おいでのとまつた處ところを見みたり、まだ／＼一層もつとかなしい夢ゆめを見て枕まくら紙かみがびつしよりに成な

つた事もござんす、高ちやんなぞは夜る寐るからとて枕を取るよりはやく鼾の聲たかく、  
 宜い心持らしいが何んなに浦山しうござんせう、私はどんな疲れた時でも床へ這入  
 ると目が冴へて夫は夫は色々々の事を思ひます、貴君は私に思ふ事があるだらうと察して  
 居て下さるから嬉しいけれど、よもや私が何をおもふか夫れこそはお分りに成りますまい、  
 考へたとて仕方がない故人前ばかりの大陽氣、菊の井のお力は行ぬけの締りなしだ、  
 苦勞といふ事はしるまいと言ふお客様もござります、ほんに因果とでもいふものか  
 私が身位かなしい者はあるまいと思ひますとて潜然とするに、珍らしい事陰氣のはな  
 しを聞かせられる、慰めたいにも本末をしらぬから方がつかぬ、夢に見てくれるほど實  
 があらば奥様にしてくれる位いひそうな物だに根つからお聲がゝりも無いは何ういふ物  
 だ、古風に出るが袖ふり合ふもさ、こんな商賣を嫌だと思ふなら遠慮なく打明けば  
 なしを爲るが宜い、僕は又お前のやうな氣では寧氣樂だとかいふ考へで浮いて渡る事かと  
 思つたに、夫れでは何か理屈があつて止むを得ずといふ次第か、苦しからずは承りたい物  
 だといふに、貴君には聞いて頂かうと此間から思ひました、だけれども今夜はいけま  
 せぬ、何故く、何故でもいけませぬ、私は我まゝ故、申まいと思ふ時は何うしても嫌や  
 ござんすとて、ついと立つて椽がはへ出るに、雲なき空の月かげ涼しく、見おろす町に

からころと駒下駄の音さして行かふ人のかけ分明なり、結城さんと呼ぶに、何だとして傍へゆけば、まあ此處へお座りなさいと手を取りて、あの水菓子屋で桃を買ふ子がござんしよ、可愛らしき四つ計の、彼子が先刻の人のでござんす、あの小さな子心にもよく憎くいと思ふと見えて私の事をば鬼々といひまする、まあ其様な悪者に見えまするかとして、空を見あげてホツと息をつくさま、堪へかねたる様子は五音の調子にあらはれぬ。

## 四

おなじ新開の町はづれに八百屋と髮結床が庇合のやうな細露路、雨が降る日は傘もさ、れぬ窮屈さに、足もととは處々、溝板の落し穴あやふげなるを中にして、雨側を立てたる棟割長屋、突當りの芥溜わきに九尺二間の上り框朽ちて、雨戸はいつも不用心のたてつけ、流石に一方口にはあらで山の手の仕合は三尺斗の椽の先に草ぼうくの空地、それが端を少し圍つて青紫蘇、ゑぞ菊、隠元豆の蔓などを竹のあら垣に搦ませたるがお力が所縁の源七が家なり、女房はお初といひて二十八か九にもなるべし、貧にやつれたれば七つも年の多く見えて、お齒黒はまだらに生へ次第の眉毛

みるかげもなく、洗あらひざらしの鳴海なるみの裕衣ゆかたを前まへと後うしろを切りかへて膝ひざのあたりは目立めたぬやう  
 に小針こはりのつぎ當あて、狹帶せまおびきりゝと締しめて蟬表せみおもての内職ないしよく、盆前ぼんまへよりかけて暑あつさの時じ  
 分ぶんをこれが時ときよと大汗おほあせになりての勉強べんきやう、強つよせはしなく、揃そろへたる籐とうを天井てんげうから釣下つりさげ  
 て、しばしの手數てすうも省はぶかんとて敷かすのあがるを樂たのしみに脇目わきめもふらぬ様さまあはれなり。もう日ひ  
 が暮くれたに太吉たきちは何故なぜかへつて來ぬ、源げんさんも又何處またどこを歩あるいて居ゐるかしらんとて仕事しごとを片かた  
 づけて一服吸ぶくすいつけ、苦勞くろうらしく目をぼちつかせて、更さらに土瓶どびんの下したを穿ほちくり、蚊かいぶし火鉢ひばち  
 に火ひを取分とりわけて三尺じやくさんの椽もちいだに持ひろ出し、拾ひろひ集あつめの杉すぎの葉はを冠かぶせてふう〜と吹ふきたつ立たつれば、  
 ふす〜と烟けふりたちのぼりて軒場のきばにのがれる蚊かの聲こゑ凄あざまじ、太吉たきちはがた〜と溝板どぶいたの音おと  
 をさせて母かさん今戻いまもどつた、お父とつさんも連つれて來きたよと門口かどぐちから呼よび立たつるに、大層たいそうおそ  
 いではないかお寺てらの山やまへでも行ゆきはしないかと何どの位案くらあんじたらう、早はやくお這入はいりといふに太吉たきち  
 を先さきに立たて、源げん七しちは元氣げんきなくぬつと上あがる、おやお前まへさんお歸かへりか、今日けふは何どんなに暑あつか  
 つたでせう、定さだめて歸かへりが早はやからうと思おもうて行ぎやうずみ水みづを沸わかして置おきました、ざつと汗あせを流なが  
 したら何どうでござんす、太吉たきちもお湯ぶうに這入はいりなといへば、あいと言いつて帶おびを解とく、お待まちお待まち  
 今加減いまかげんを見てやるとて流ながしもとに盥たらいを据すへて釜かまの湯ゆを汲くみだし、かき廻まわして手拭てぬぐひを入れ  
 て、さあお前まへさん此子このこをもいれて遣やつて下くだされ、何なにをぐたりと爲してお出いでなさる、暑あつさにで

も障りはしませぬか、さうでなければ一杯あびて、さつぱりに成つて御膳あがれ、太吉が  
 待つて居ますからといふに、おゝ左様だと思ひ出したやうに帯を解いて流しへ下りれば、  
 そゞろに昔しの我身が思はれて九尺二間の臺處で行水つかふとは夢にも思はぬもの、  
 ましてや土方の手傳ひして車の跡押にと親は生つけても下さるまじ、あゝ詰らぬ夢を見  
 たばかりにと、ちつと身にしみて湯もつかはねば、父ちやん脊中洗つてお呉れと太吉は無  
 心に催促する、お前さん蚊が喰ひますから早々とお上りなされと妻も氣をつくるに、  
 おいおいと返事しながら太吉にも遣はせ我れも浴びて、上にあがれば洗ひ晒せしきばく  
 の裕衣を出して、お着かへなさいましと言ふ、帯まきつけて風の透く處へゆけば、妻は野  
 代の膳のはげかゝりて足はよろめく古物に、お前の好きな冷奴にししましたとて小  
 井に豆腐を浮かせて青紫蘇の香たかく持出せば、太吉は何時しか臺より飯櫃取おろし  
 て、よつちよいよつちよいと擔ぎ出す、坊主は我れが傍に來いとて頭を撫でつゝ箸を取る  
 に、心は何を思ふとなけれど舌に覺えの無くて咽の穴はれたる如く、もう止めにするとして  
 茶碗を置けば、其様な事があります物か、力業をする人が三膳の御飯のたべられぬ  
 と言ふ事はなし、氣合ひでも悪うござんすか、夫れとも酷く疲れてかと問ふ、いや何處も  
 何とも無いやうなれど唯たべる氣にならぬといふに、妻は悲しきうな目をしてお前さん又

例れいのが起おこりましたらう、夫それは菊きくの井ゐの鉢はち着さは甘うまくもありましたらうけれど、今いまの身み分ぶんで思おもひ出だした處ところが何なんとなりまする、先さきは賣うり物もの買かひ物ものお金かねさへ出で來きたら昔むかしのやうに可か愛わいがつても呉くれませう、表おもてを通とほつて見みても知しれる、白おしろい粉こなつけて美い衣きもの類るいきて迷まよふて來くる人ひとを誰たれかれなしに丸まるめるが彼あの人ひと達たちが商しやう買ばい、あゝ我おれが貧びん乏ぼうに成なつたから構かまいつけて呉くれぬなと思おもへば何なんの事ことなく濟すみましやう、恨うらみにでも思おもふだけがお前まへさんが未み練れんでござんす、裏うら町まちの酒さ屋やの若わかい者もの知しつて出いでなさらう、二に葉はやのお角かくに心こころから落おち込んで、かけ先さきを殘のこらず使つかひ込こみ、夫それを埋うめやうとて雷らい神じん虎こが盆ぼん筵ごぎの端はしについたが身みの詰つまり、次第しだいに悪わるいが事ことが染しみて終しまひには土ど藏ぞうやぶりまでしたさうな、當い時ま男をとこは監かん獄ごく入いりしてもつそう飯めしたべて居いやうけれど、相あ手てのお角かくは平へい氣きなもの、おもしろ可を笑かしく世よを渡わたるに咎とがめひとなく美み事こと繁はん昌じやうして居あります、あれを思おもふに商しやう買ばい人にんの一ひと徳とく、だまされたは此こ方ちやうの罪つみ、考かんがへたとて始はじまる事ことではござんせぬ、夫それよりは氣きを取とり直なほして稼かげふに精せいを出だして少すこしの元もと手ても拵こしらへるやうに心こころがけて下くだされ、お前まへに弱よはられては私わたしも此この子こも何なんうする事こともならで、夫それこそ路ろ頭とうに迷まよはねば成なりませぬ、男をとこらしく思おもひ切きる時ときあきらめてお金かねさへ出で來きようならお力りきはおろか、小こ紫むらさきでも揚あげ巻まきでも別べつ荘さうこしらへて圍かこうたら宜ようござりましよう、最もうそんな考かんがへ事ことは止やめにして機き嫌けんよく御ご膳ぜんあがつて下くだされ、坊ぼう主ずまでが陰いん氣きらう沈しづん

で仕舞しまいましたといふに、みれば茶ちやわん碗わんと箸はしを其處そこに置いて父ちちと母ははとの顔かほをば見みくらべて何なに
  
 とは知しらず氣きになる様子やうす、こんな可愛かわひい者ものさへあるに、あのやうな狸たぬきの忘わすれられぬは何なんの
   
 因果いんぐわかと胸むねの中なかかき廻まわされるやうなるに、我われながら未練みれんものめと叱しかりつけて、いや我お
  
 れだとして其様そのやうに何時いつまでも馬鹿ばかでは居いぬ、お力りきなど、名計なばかりもいつて呉くれるな、いはれる
   
 と以前もとの不出ふでかかんがだを考かんへ出だしていよく顔かほがあげられぬ、何なんの此身このみになつて今いま更何さらをお
   
 もふ物ものか、食めしがくへぬとても夫それは身からだ體たいの加減かげんであらう、何なにも格別かくべつ案あんじてくれるには及およ
  
 ばぬ故小僧ゆゑぞうも十分ぶんにやつて呉くれとて、ころりと横よこになつて胸むねのあたりをはたくと打うちあふ
   
 ぐ、蚊遣かやりの烟けむりにむせばぬまでも思おもひにもえて身みの暑あつげなり。

## 五

誰たれ白鬼しろおにとは名なをつけし、無間地獄むげんじごくのそこはかとなく景色けしきづくり、何處どこにからくりのあ
   
 るとも見みえねど、逆さかさおと落おとしの血ちの池いけ、借しやく金きんの針はりの山やまに追おひのぼすも手ての物ものときくに、
   
 寄よつてお出いでよと甘あまへる聲こゑも蛇へびくふ雉子きざすと恐おそろしくなりぬ、さりとも胎たい内ない十月つきの同おなじ事こと
  
 して、母ははの乳房ちぶさにすがりし頃ころは手打てうちくあわゝの可愛かわいげに、紙幣さつと菓子くわしとの二ふたつ取とりには

おこしをお呉れと手を出したる物なれば、今の稼業に誠はなくとも百人の中の一人に眞か  
 らの涙をこぼして、聞いておくれ染物やの辰さんが事を、昨日も川田やが店でおちやつ  
 びいのお六めと悪戯まわして、見たくもない往來へまで擔ぎ出して打ちつ打たれつ、あ  
 な浮いた了、簡で末が遂げられやうか、まあ幾歳だとおもふ三十は一昨年、宜い加減に  
 家でも拵へる仕覺をしてお呉れと逢ふ度に異見をするが、其時限りおいくと空返事に  
 して根つから氣にも止めては呉れぬ、父さんは年をとつて、母さんと言ふは目の悪いひと  
 だから心配をさせないやうに早く締つてくれ、ば宜いが、私はこれでも彼の人の半纏  
 をば洗濯して、股引のほころびでも縫つて見たいと思つて居るに、彼んな浮いた心で  
 は何時引取つて呉れるだらう、考へるとつく／＼奉公が嫌やになつてお客を呼ぶに張  
 合もない、あゝくさくするとして常は人をも欺す口で人の愁らきを恨みの言葉、頭痛を  
 押へて思案に暮れるもあり、あゝ今日は盆の十六日だ、お焔魔様へのお祭りに連れ立つ  
 て通る子供達の奇麗な着物きて小遣ひもらつて嬉しさうな顔してゆくは、定めて定めて  
 ふたりそと二人揃つて甲斐性のある親をば持つて居るのである、私が息子の與太郎は今日の休みに御  
 主人から暇が出て何處へ行つて何んな事して遊ぼうとも定めし人が羨しかる、父さんは  
 呑ぬけ、いまだに宿とても定まるまじく、母は此様な身になつて恥かしい紅白粉、よし

居處ゐどころが分つたとして彼の子は逢あひに來ても呉れまじ、去年きよねん向島むかふじまの花見はなみの時とき女房にようぼう  
 づくりして丸鬚まるまげに結ゆつて朋輩ほうばいと共に遊あそびあるきしに土手どての茶屋ちやうであの子こに逢あつて、こ  
 れこゝろと聲こゑをかけしにさへ私の若く成なりしに呆あきれて、お母つかさんでござりますかと驚おどろきし様子やうす  
 ましてや此大島田このおほしまだに折をりふしは時好じこうの花簪はなかんざしさしひらめかしてお客きやくを捉とらへて串談じやうだん  
 いふ處ところを聞かば子心こゝろには悲かなしくも思おもふべし、去年きよねんあひたる時とき今は駒形こまかたの蟬せみ蠟ろうそくやに奉  
 公こうして居ゐまする、私わたしは何なにな愁つらき事ことありとも必かならず辛しん抱ぼうしとげて一人前にんまへの男をとこになり、  
 父ととさんをもお前まへをも今いまに樂らくをばお爲させ申まします、何どうぞ夫それまで何なんなりと堅氣かたぎの事ことをして一  
 人ひとりで世渡りよわたりをして居ゐて下くだされ、人ひとの女房にようぼうにだけはならず居ゐて下くだされと異見いけんを言いはれ  
 しが、悲かなしきは女子をなごの身みの寸燐まつちの箱はこはりして一人ひとり口過くちすぐしがたく、さりとして人ひとの臺處だいどころ  
 を這はふも柔弱にうじやくの身體からだなれば勤つとめがたくて、同おなじ憂うき中なかにも身みの樂らくなれば、此こん様な事ことし  
 て日ひを送おくる、夢ゆめさら浮ういた心こゝろでは無なけれど言い甲斐ひがひのないお袋ふくろと彼あの子こは定さだめし爪つまはじきす  
 るであらう、常つねは何なんとも思おもはぬ島田しまだがめ今日けふ日ひ斗はかりは恥はづかしいと夕ゆふぐれの鏡かがみの前まへに涕なみだくむもあ  
 るべし、菊きくの井ゐのお力りきとても惡魔あくまの生うま替がりにはあるまじ、さる子細しさいあればこそ此處こゝの流なが  
 れおちに落おちこんで嘘うそのありたけ串談じやうだんに其日そのひを送おくつて情なさけは吉野紙よしのがみの薄物うすものに、螢ほたるの光ひかりぴつ  
 かりとする斗ばかり、人ひとの涕なみだは百年ねんも我がまんして、我われゆゑ死しぬる人ひとのありとも御愁傷ごしうしようさまと脇わき

を向くつらさ他處目も養ひつらめ、さりとも折ふしは悲しき事恐ろしき事胸にたゝまつて、  
 泣くにも人目を恥れば二階座敷の床の間に身を投ふして忍び音の憂き涕、これをば友朋  
 輩にも洩らさじと包むに根生のしつかりした、氣のつよい子といふ者はあれど、障れ  
 ば絶ゆる蛛の糸のはかない處を知る人はなかりき、七月十六日の夜は何處の店にも客  
 人入込みて都々一端歌の景氣よく、菊の井の下座敷にはお店者五六人寄集まりて  
 調子の外れし紀伊の國、自まんも恐ろしき洞間聲に霞の衣衣紋坂と氣取るもあり、力  
 ちやんは何うした心意氣を聞かせないか、やつたくと責められるに、お名はさゝねど  
 このぎなか、ついッとほり通の嬉しがらせを言つて、やんやくと喜ばれる中から、我戀は細  
 そだにがはまるきはし  
 谷川の丸木橋わたるにや怕し渡らねばと謳ひかけしが、何をか思ひ出したやうにあゝ  
 私は一寸無禮をします、御免なさいよとて三味線を置いて立つに、何處へゆく何處へゆ  
 く、逃げてはならないと坐中の騷ぐに照ちやん高さん少し頼むよ、直き歸るからとせずつ  
 と廊下へ急ぎ足に出しが、何をも見かへらず店口から下駄を履いて筋向ふの横町  
 の闇へ姿をかくしぬ。  
 お力は一散に家を出て、行かれる物なら此まゝに唐天竺の果までも行つて仕舞たい、あゝ  
 嫌だ嫌だ嫌だ、何うしたなら人の聲も聞えない物の音もしない、静かな、静かな、自分の

心も何もぼうつとして物思ひのない處へ行かれるであらう、つまらぬ、くだらぬ、面  
 白くない、情ない悲しい心細い中に、何時まで私は止められて居るのかしら、これ  
 が一生か、一生がこれか、あゝ嫌だくと道端の立木へ夢中に寄かゝつて暫時そこに  
 立どまれば、渡るにや怕し渡らねばと自分の謳ひし聲を其まゝ何處ともなく響いて来るに、  
 仕方がない矢張り私も丸木橋をば渡らずはなるまい、父さんも踏かへして落してお仕舞な  
 され、祖父さんも同じ事であつたといふ、何うで幾代もの恨みを背負て出た私なれば爲  
 する丈の事はしなければ死んでも死なれぬのであらう、情ないとても誰れも哀れと思ふてく  
 れる人はあるまじく、悲しいと言へば商買がらを嫌ふかと一ト口に言はれて仕舞、ゑゝ  
 何うなりとも勝手になれ、勝手になれ、私には以上考へたとて私の身の行き方は分らぬ  
 なれば、分らぬなりに菊の井のお力を通してゆかう、人情しらず義理しらずか其様な  
 事もおも思ふまい、思ふたとて何うなる物ぞ、此様な身で此様な業體で、此様な宿世で、何  
 うしたからとて人並みでは無いに相違なければ、人並の事を考へて苦勞する丈間違ひであ  
 る、あゝ陰氣らしい何だとして此様な處に立つて居るのか、何しに此様な處へ出て来たのか、  
 馬鹿らしい氣違じみた、我身ながら分らぬ、もうく飯りませうとて横町の闇をば出  
 はなれて夜店の並ぶにぎやかなる小路を氣まぎらしにとぶらゝ歩るけば、行かよふ人の

顔かほ少すくさくく、擦すれ違ちがふ人ひとの顔かほさへも遙はるかとほくに見みるやう思おもはれて、我わが踏ふむ土つちのみ一丈も上うへにあがり居ゐる如ごとく、がやくといふ聲こゑは聞きゆれど井いの底そこに物ものを落おしたる如ごとき響ひびきに聞きなされて、人ひとの聲こゑは、人ひとの聲こゑ、我わが考かんがへは考かんがへと別べつ々に成なりて、更さらに何事なにごとにも氣きのまぎれる物ものなく、人立ひとたちおびたゞしき夫婦めをとあらそひの軒先のきさきなどを過すぐるとも、唯我たゞわれのみは廣野ひろのの原はらの冬枯ふゆがれを行ゆくやうに、心こゝろに止とまる物ものもなく、氣きにかゝる景色けしきにも覺おほえぬは、我われながら酷ひどく逆ひ上せて人ひと心こゝろのないのにと覺おぼ束つかなく、氣きが狂くるひはせぬかと立たちどまる途端とたん、お力りき何處どこへ行ゆくとて肩かたを打うつ人ひとあり。

## 六

十六日かなは必まち待まちまする來きて下くだされと言いひしをも何なにも忘わすれて、今いままで思おもひ出だしもせざりし結城ゆふきの朝とも之助すけに不圖ふと出合であひ、あれと驚おどろき顔かほつきの例れいに似合にあぬ狼狽あわてかたがをかしきとて、からくをとこと男をとこの笑わらふに少すこし恥はづかしく、考かんがへ事ごとをして歩あるいて居ゐたれば不意ふいのやうに惶あはて、仕舞まいました、よく今夜こんやは來きて下くださりましたと言いへば、あれほど約束やくそくをして待まつてくれぬは不ふ心しんぢう中ちゆうとせめられるに、何なんなりと仰おつしやれ、言い譯ひわけは後のちにしまするとて手てを取りとりて引ひけば

彌次馬がうるさいと氣をつける、何うなり勝手に言はせませう、此方は此方と人中を分けて伴ひぬ。

下座敷はいまだに客の騒ぎはげしく、お力の中座をしたるに不興して喧しかりし折から、店口にておやお飯りかの聲を聞くより、客を置きりに中坐するといふ法があるか、飯つたらば此處へ來い、顔を見ねば承知せぬぞと威張たてるを聞流しに二階の座敷へ結城を連れあげて、今夜も頭痛がするので御酒の相手は出來ませぬ、大勢の中に居れば御酒の香に酔ふて夢中になるも知れませぬから、少し休んで其後は知らず、今は御免なさりませと斷りを言ふてやるに、夫れで宜いのか、怒りはしないか、やかましくなれば面倒であらうと結城が心づけるを、何のお店もの、白瓜が何んな事を仕出しませう、怒るなら怒れでござんすとて小女に言ひつけてお銚子の支度、來るをば待かねて結城さん今夜は私に少し面白くない事があつて氣が變つて居まするほどに其氣で附合て居て下され、御酒を思ひ切つて呑みまするから止めて下さるな、酔ふたらば介抱して下されといふに、君が酔つたを未だに見た事がない、氣が晴れるほど呑むは宜いが、又頭痛がはじまりはせぬか、何が其様なに逆鱗にふれた事がある、僕らに言つては悪い事かと問はれるに、いゑ貴君には聞て頂きたいのでござんす、酔ふと申ますから驚いてはいけませぬ

と嬌然として、大湯呑を取よせて二三杯は息をもつかざりき。  
常には左のみに心も留まらざりし結城の風采の今宵は何となく尋常ならず思はれて、肩  
中のありて背のいかにも高き處より、落つて物をいふ重やかなる口振り、目つきすこの凄  
くて人を射るやうなるも威嚴の備はれるかと嬉しく、濃き髪かみの毛けを短みぢかく刈あげて頬足ほし  
のくつきりとせしなど今更のやうに眺られ、何をうつとりして居ると問はれて、貴君あなたの  
お顔かほを見て居ますのさと言へば、此奴めがと睨みつけられて、お、怕いお方かたと笑つて居る  
に、串談じやうだんはのけ、今夜は様子やうすが唯でない聞たら怒るか知らぬが何か事件じけんがあつたかとどふ  
何しに降つて沸いた事もなければ、人との紛雜いざなどはよし有つたにしろ夫れは常の事こと、氣  
にもかゝらねば何しに物を思ひませう、私の時より氣まぐれを起すは人のするのでは無く  
て皆心みなこころからの淺ましい譚わけがござんす、私は此様な賤しい身の上みうへ、貴君は立派りつぱなお方様かたさま、  
おもふ事は反對うらはらにお聞きになつても汲んで下さるか下さらぬか其處そこほどは知らねど、よし  
笑ひ物ものになつても私は貴君あなたに笑ふて頂いたぎ度、今夜は残のこらず言ひまする、まあ何から申さう  
胸むねがもめて口が利かれぬとて又もや大湯呑おほゆのみに呑む事ことさかんなり。  
何より先さきに私が身みの自墮落じだらくを承知しやうちして居て下され、もとより箱入りの生娘きむすめならねば少し  
は察さつしても居て下さろうが、口奇麗くちぎれいな事ことはいひますとも此このあたりの人ひとに泥どろの中の蓮はすとや

ら、悪業に染まらぬ女子があらば、繁昌どころか見に来る人もあるまじ、貴君は別物、  
 私が處へ来る人とても大底はそれと思しめせ、これでも折ふしは世間さま並の事を思ふ  
 て恥かしい事つらい事情ない事とも思はれるも寧九尺二間でも極まつた良人といふに添う  
 て身を固めようと考へる事もござんすけれど、夫れが私は出来ませぬ、夫れかと言つて來  
 るほどのお人に無愛想もなりがたく、可愛い、いとしいの、見初ましたのと出鱈目の  
 お世辭をも言はねばならず、數の中には眞にうけて此様な厄種を女房にと言ふて下さる方  
 もある、持たれたら嬉しいか、添うたら本望か、夫れが私は分りませぬ、そもくの最  
 初から私は貴君が好きで好きで、一日お目にかゝらねば戀しいほどなれど、奥様にと  
 言はれたら浮氣者でござんせう、あゝ此様な浮氣者には誰れがしたと思召、三代傳は  
 つての出来そこね、親父が一生もかなしい事とてござんしたとてほろりとするに、其親父さ  
 むはと問ひかけられて、親父は職人、祖父は四角な字をば讀んだ人でござんす、つま  
 りは私のやうな氣違ひで、世に益のない反古紙をこしらへしに、版をばお上から止められ  
 たとやら、ゆるされぬとかに斷食して死んださうに御座んす、十六の年から思ふ事があ  
 つて、生れも賤しい身であつたれど一念に修業して六十にあまるまで仕出來したる事な

く、終は人の物笑ひに今では名を知る人もなしとて父が常住歎いたを子供の頃より  
 聞知つて居りました、私の父といふは三つの歳に椽から落ちて片足あやしき風になりたれ  
 ば人中に立まじるも嫌やとて居職に飾の金物をこしらへましたれど、氣位たかくて  
 人愛のなければ鼻負にしてくれる人もなく、あゝ私が覺えて七つの年の冬でござんした、  
 寒中親子三人ながら古裕衣で、父は寒いも知らぬか柱に寄つて細工物の工夫をこら  
 すに、母は欠けた一つ竈に破れ鍋かけて私に去る物を買ひに行けといふ、味噌こし下げて  
 端たのお錢を手に握つて米屋の門までは嬉しく驅けつけたれど、歸りには寒さの身にしみ  
 て手も足も龜かみたれば五六軒隔てし溝板の上の氷にすべり、足溜りなく轉ける機  
 會に手の物を取落して、一枚はづれし溝板のひまよりぎらりと翻れ入れば、下は行  
 くみづ水きたなき溝泥なり、幾度も覗いては見たれど是れをば何として拾はれませう、其  
 のと悉し時私は七つであつたれど家の内の様子、父母の心をも知れてあるにお米は途中で落  
 ましたと空の味噌こしさげて家には歸られず、立てしばらく泣いて居たれど何うしたと問  
 ふて呉れる人もなく、聞いたからとて買ってやらうと言ふ人は猶更なし、あの時近處に  
 川なり池なりあらうなら私は定し身を投げて仕舞ひましたら、話しは誠の百分一、私は其  
 のころ頃から氣が狂つたのでござんす、販りの遅きを母の親案して尋ねに來てくれたをば時機

うち  
 に家へは戻つたれど、母も物物はらず父親も無言に、誰れ一人私をば叱る物もなく、家の  
 うち  
 内森として折々溜息の聲のもれるに私は身を切られるより情なく、今日は一日斷食に  
 せうと父の一言いひ出すまでは忍んで息をつくやうで御座んした。  
 いひさしてお力は溢れ出る涙の止め難ければ紅ひの手巾かほに押當て其端を喰ひし  
 めつゝ物いはぬ事小半時、坐には物の音もなく酒の香したひて寄りくる蚊のうなり聲の  
 み高く聞えぬ。  
 かほ  
 顔をあげし時は頬に涙の痕はみゆれども淋しげの笑みをさへ寄せて、私は其様な貧乏人  
 の娘、氣違ひは親ゆづりで折ふし起るのでござります、今夜も此様な分らぬ事いひ出して  
 さああなたごめいわく  
 嘸貴君御迷惑で御座んしてしよ、もう話しはやめます、御機嫌に障つたらばゆるして  
 くだ  
 下され、誰れか呼んで陽氣にしませうかと問へば、いや遠慮は無沙汰、その父親は早  
 く死くなつてか、はあ母さんが肺結核といふを煩つて死なりましたから一週忌の來ぬ  
 ほどに跡を追ひました、今居りましても未だ五十、親なれば褒めるでは無けれど細工は誠  
 に名人と言ふても宜い人で御座んした、なれども名人だとして上手だとして私等が家  
 のやうに生れついたは何にもなる事は出來ないので御座んせう、我身の上にも知られます  
 るとて物思はしき風情、お前は出世を望むなど突然に朝之助に言はれて、ゑツと驚

きし様子やうすに見えしが、私等わたしらが身みにて望のぞんだ處ところが味み噌そこしが落おち、何なんの玉たまの輿こしまでは思おもひが  
 けませぬといふ、嘘うそをいふは人ひとに依よる始はじめから何なにも見み知しつて居ゐるに隠かくすは野や暮ぼの沙さ汰たでは  
 ないか、思おもひ切きつてやれくとあるに、あれ其そのやうなけしかけ詞ことばはよして下くだされ、何どうで  
 此こん様な身みでござんするにと打うちしほれて又またの言いはず。

今宵こよひもいたく更ふけぬ、下坐敷したざしきの人ひとはいつか歸かへりて表おもての雨戸あまどをたてると言いふに、朝とも之すけ助お  
 どろきて歸かへり支度したくするを、お力は何どうでも泊とまらするといふ、いつしか下駄げたをも藏かくさせたれ  
 ば、足あしを取とられて幽靈ゆうれいならぬ身みの戸とのすき間まより出いづる事こともなるまじとて今宵こよひは此處こゝに泊とま  
 る事こととなりぬ、雨戸あまどを鎖とぎす音おと一ひとしきり賑にぎはしく、後のちには透すきもる燈火ともしびのかげも消きえて、  
 唯たゞ軒下のきしたを行ゆきかよふ夜行やこうの巡査じゆんさの靴音くつおとのみ高たかかりき。

## 七

思おもひ出だしたとて今更いまさらに何どうなる物ものぞ、忘わすれて仕舞しまへ諦あきらめて仕舞しまへと思案しあんは極きめながら、  
 去年きよねんの盆ぼんには揃そろひの浴衣ゆかたをこしらへて二人一處ふたりしよに藏くら前まへへ參詣さんけいしたる事ことなんと思おもふと  
 もなく胸むねへうかびて、盆ぼんに入りては仕事しごとに出いづる張はりもなく、お前まへさん夫それではならぬぞへと

諫め立てる女房の詞も耳うるさく、エ、何も言ふな黙つて居るとて横になるを、黙つて居ては此日が過ぎれませぬ、身體が悪くば薬も吞むがよし、御醫者にかゝるも仕方なけれど、お前の病ひは夫れではなしに氣さへ持直せば何處に悪い處があるう、少しは正氣に成つて勉強をして下されといふ、いつでも同じ事は耳にたこが出来て氣の薬にはならぬ、酒でも買て来てくれ氣まぎれに呑んで見やうと言ふ、お前さん其お酒が買へるほどなら嫌やお言ひなさるを無理に仕事に出て下されとは頼みませぬ、私が内職とて朝から夜にかけて十五錢が關の山、親子三人口おも湯も満足には呑まれぬ中で酒を買へとは能く能くお前無茶助になりなさんした、お盆だといふに昨日らも小僧には白玉一つこしらへても喰べさせず、お精靈さまのお店かぎりも拵へくれねば御燈明一つで御先祖様へお詫びを申て居るも誰が仕事だとお思ひなさる、お前が阿房を盡してお力づらめに釣られたから起つた事、いふては悪るけれどお前は親不孝子不孝、少しは彼の子のゆくすゑおもふて眞人間になつて下され、御酒を呑で氣を晴らすは一時、眞から改心して下さらねば心元なく思はれますとて女房打なげくに、返事はなくて吐息折々に太く身動きもせず仰向ふしたる心根の愁さ、其身になつてもお力が事の忘れられぬが、十年つれそふて子供まで儲けし我れに心かぎりの辛苦をさせて、子には檻樓を下

げさせ家いえとしては二疊じよう一間まの此こん様な犬小屋いぬごや、世間せけん一體たいから馬鹿ばかにされて別物べつものにされて、よ  
 しや春秋はるあきの彼岸ひがんが來くればとて、隣となり近處きんじよに牡丹ぼたんもち團子だんごと配くばり歩あるく中なかを、源七げんが家いえへ  
 は遣やらぬが能よい、返禮へんれいが氣きの毒どくなとて、心切しんせつかは知しらねど十軒長屋じゆんげんの一軒けんは除のけ物もの、  
 男おとこは外出そとでがちなればいさゝか心に懸かるまじけれど女をんな、心こころには遣やる瀬せのなきほど切せつなく悲かな  
 しく、おのづと肩身かたみせばまりて朝あさ夕ゆふの挨拶あいさつも人の目色めいろを見るやうなる情なさけなき思おもひもす  
 るを、其それをば思おもはで我わが情婦こひうへの上うへばかりを思おもひつゞけ、無情つれなき人の心こころの底そこが夫それほどま  
 でに戀こひしいか、晝ひるも夢ゆめに見みて獨ひとごと言ことにいふ情なさけなき、女によう房ぼうの事ことも子この事ことも忘れはてゝお  
 りきとり、いのちやこゝろ淺あさましい口惜くちをしい愁つらい人ひとと思おもふに中々なか言葉ことばは出いでずして恨うら  
 の露つゆを目めの中うちにふくみぬ。  
 物ものいはねば狭せまき家いえの内うちも何なんとなくうら淋さびしく、くれゆく空そらのたどゞしきに裏屋うらやはまして  
 うすくら薄うす暗くく、燈火あかりをつけて蚊遣かやりふすべて、お初はつは心こころ細ほそく戸との外そとをながむれば、いそ／＼と歸かへり來くる太吉郎たきちろうの姿すがた、何なにやらん大袋おほぶくろを兩手りようてに抱かへて母かさん母かさんこれを貰もらつ  
 て來きたと莞爾にっことして驅かけ込こむに、見みれば新開しんかいの日ひの出でやがかすていら、おや此こん様な好いい  
 お菓子くわしを誰だれに貰もらつて來きた、よくお禮れいを言いつたかと問とへば、あゝ能よくお辭義じぎをして貰もらつて  
 來きた、これは菊きくの井ゐの鬼姉おにねへさんが呉くれたのと言いふ、母はは顔色かほいろをかへて圖太づぶとい奴やつめが是こ

れほどの淵に投げ込んで未だいちめ方が足りぬと思ふか、現在の子を使ひに父さんの心を動かして遣し居る、何といふて遣したと言へば、表通りの賑やかな處に遊んで居たらば何處のか伯父さんと一處に来て、菓子を買つてやるから一處にお出といつて、我らは入らぬと言つたけれど抱いて行つて買つて呉れた、喰べては悪いかへと流石に母の心をはかりかね、顔をのぞいて猶豫するに、あゝ年がゆかぬとて何たら譯の分らぬ子ぞ、あの姉さんは鬼ではないか、父さんを怠惰者にした鬼ではないか、お前の衣類のなくなつたも、お前の家のなくなつたも皆あの鬼めがした仕事、喰ひついても飽き足らぬ悪魔にお菓子を貰つた喰べても能いかと聞くだけが情ない、汚い穢い此様な菓子、家へ置くのも腹がたつ、捨て仕舞な、捨てお仕舞、お前は惜しくて捨てられないか、馬鹿野郎めと罵りながら袋をつかんで裏の空地へ投出せば、紙は破れて轉び出る菓子の、竹のあら垣打こえて溝の中に落ちむめり、源七はむくりと起きてお初と一聲大きくいふに何か御用かよ、尻目にかけて振むかふともせぬ横顔を睨んで、能い加減に人を馬鹿にしる、黙つて居れば能い事にして悪口雑言は何の事だ、知人なら菓子位子子供にくれるに不思議もなく、貰ふたとして何が悪い、馬鹿野郎呼はりには太吉をかこつけに我れへの當こすり、子に向つて父親の讒訴をいふ女房氣質を誰れが教へた、お力が鬼なら手前は魔王、商人のだま

しは知れて居れど、妻たる身の不貞腐れをいふて濟むと思ふか、土方をせうが車を引かうが亭主は亭主の權がある、氣に入らぬ奴を家には置かぬ、何處へなりとも出てゆけ、出てゆけ、面白くもない女郎めと叱りつけられて、夫れはお前無理だ、邪推が過る、何しにお前に當つけよう、この子が餘り分らぬと、お力の仕方が憎くらしきに思ひあまつて言つた事を、とツこに取つて出てゆけとまでは慘う御座んす、家の爲をおもへばこそ氣に入らぬ事を言ひもする、家を出るほどなら此様な貧乏世帯の苦勞をば忍んでは居ませぬと泣くに貧乏世帯に飽きがきたなら勝手に何處なり行つて貰はう、手前が居ぬからとて乞食にもなるまじく太吉が手足の延ばされぬ事はなし、明けても暮れても我れが店おろしかお力への妬み、つくづく聞き飽きてもう厭やに成つた、貴様が出ずば何ら道同じ事をしくもない九尺二間、我れが小僧を連れて出やう、さうならば十分に我鳴り立る都合もよからう、さあ貴様が行くか、我れが出ようかと烈しく言はれて、お前はそんなら眞實に私を離縁する心かへ、知れた事よと例の源七にはあらざりき。

お初は口惜しく悲しく情なく、口も利かれぬほど込上る涕を呑込んで、これは私が悪う御座んした、堪忍をして下され、お力が親切で志して呉れたものを捨て仕舞つたは重々悪う御座いました、成程お力を鬼といふたから私は魔王で御座んせう、モウいひま

せぬ、モウいひませぬ、決してお力の事につきて此後とやかく言ひませず、蔭の噂します  
 まい故離縁だけは堪忍して下され、改めて言ふまでは無けれど私には親もなし兄弟  
 もなし、差配の伯父さんを仲人なり里なりに立て、來た者なれば、離縁されての行き處  
 とてはありませぬ、何うぞ堪忍して置いて下され、私は憎くかろうと此子に免じて置い  
 くだされ、謝りますとて手を突いて泣けども、イヤ何うしても置かれぬとて其後は物言は  
 ず壁に向ひてお初が言葉は耳に入らぬ體、これほど邪慳の人ではなかりしをと女房  
 あきれて、女に魂を奪はるれば是れほどまでも淺ましくなる物か、女房が歎きは更な  
 り、遂ひには可愛き子をも餓へ死させるかも知れぬ人、今詫びたからとて甲斐はなしと覺  
 悟して、太吉、太吉と傍へ呼んで、お前は父さんの傍と母さんと何處が好い、言ふて見ろ  
 と言はれて、我らはお父さんは嫌い、何にも買つて呉れない物と眞正直をいふに、そ  
 んなら母さんの行く處へ何處へも一處に行く氣かへ、あゝ行くともとて何とも思はぬ様子  
 に、お前さんお聞きか、太吉は私につくといひまする、男の子なればお前も欲しからうけ  
 れど此子はお前の手には置かれぬ、何處までも私が貰つて連れて行きます、よう御座んす  
 か貰ひまするといふに、勝手にしろ、子も何も入らぬ、連れて行き度ば何處へでも連れて  
 行け、家も道具も何も入らぬ、何うなりともしるとて寐轉びしまゝ振向んともせぬに、何

の家うちも道具だうぐも無い癖くせに勝手かつてにしるもないもの、これから身み一つになつて仕したいまゝの道だうら  
 樂くなり何なになりお盡つくしなされ、最もういくら此このこ子を欲ほしいと言いつても返かへす事ことでは御座ござんせぬ  
 ぞ、返かへしはしませぬぞと念ねんを押おして、押お入れ探さぐつて何なにやらの小風呂敷こぶろしき取りいだ  
 此このこ子の寐間着ねまきの袷あはせ はらがけと三尺じやくだけ貫もらつて行ゆきます、御酒ごしゆの上うへといふでもななければ、  
 醒さめての思案しあんもありますまいけれど、よく考かんがへて見みて下くだされ、たとへ何どのやうな貧苦ひんくの中  
 でも二人ふたり双そつて育そだてる子は長ちやうじや者ものの暮くらしといひまする、別わかれゝば片親かたおや、何なににつけても  
 不憫ふびんなは此このこ子ことお思おもひなさらぬか、あゝ腸はらはが腐くさつひと可か愛あいさも分わかりはすまい、もうお  
 別わかれ申まますと風呂敷ふろしきさげて表おもてへ出いれば、早はやくゆけゝとて呼よかへしては呉くれざりし。

## 八

魂祭たまつり過すぎて幾いくじつ日ひ、まだ盆提燈ぼんちようちんのかげ薄うすき頃ころ、新開しんかいの町まちを出いでく棺くわん二つあ  
 り、一つは駕かぢにて一つはさし擔かつぎにて、駕かぢは菊きくの井いの隠居いんきよ處よよりしのびやかに出いでぬ、大  
 路ほちに見みる人ひとのひそめくを聞きけば、彼あの子こもとんだ運うんのわるい詰つまらぬ奴やつに見み込こまれて可か愛あいさう  
 な事ことをしたといへば、イヤあれは得とくしん心こづくだと言いひまする、あの日ひの夕暮ゆふぐれ、お寺てらの山やま

で二人立ばなしをして居たといふ確かな證人もござります、女も逆上て居た男の事なれば義理にせまつて遣つたので御座るといふもあり、何のあの阿魔が義理はりを知らうぞ湯屋の歸りに男に逢ふたれば、流石に振はなして逃る事もならず、一處に歩いて話しはしても居たらうなれど、切られたは後袈裟、頬先のかすり疵、頭筋の突疵など色々あれども、たしかに逃げる處を遣られたに相違ない、引かへて男は美事な切腹、蒲團やの時代から左のみの男と思はなんだがあれこそは死花、ゑらさうに見えたといふ、何にしる菊の井は大損であらう、彼の子には結構な旦那がついた筈、取にがしては残念であらうと人の愁ひを串談に思ふものもあり、諸説みだれて取止めたる事なけれど、恨は長し人魂か何かしらず筋を引く光り物のお寺の山といふ小高き處より、折ふし飛べるを見し者ありと傳へぬ

(終)



# 青空文庫情報

底本：「文藝俱樂部第九編」博文館

1895（明治28）年9月20日

初出：「文藝俱樂部第九編」博文館

1895（明治28）年9月20日

※初出時の署名は、「一葉女史」です。

※変体仮名は、通常の仮名で入力しました。

※清音、濁音の表記の混在は、底本通りです。

※「悪《わ》るい」と「悪《わる》い」、「商買」と「商賣」、「夫《それ》」と「夫《そ》れ」、「眞實《しん》」と「眞實《ほんとう》」、「成《な》り」と「成《なり》」、「嫌《いや》」と「嫌《い》や」、「下坐敷」と「下座敷」、「其様《そん》」と「其様《そのやう》」、「愁《つ》らき」と「愁《つら》さ」、「氣違《きちがひ》」と「氣違《きちがひ》」、「中座」と「中坐」、「女房」に対するルビの「にようぼう」と「にようぼ」、「女」に対するルビの「をんな」と「おんな」、「頭痛」に対するルビの

「づつう」と「づゝう」、「結城」に対するルビの「ゆふき」と「ゆうき」、「折」に対するルビの「おり」と「をり」、「鬼」に対するルビの「おに」と「をに」の混在は底本通りです。

入力：万波通彦

校正：岡村和彦、日高直哉

2016年4月20日作成

2016年5月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# にぎりえ

樋口一葉

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>